
シンポジウム 6

尿路変向術：私の工夫

司	会	三	股	浩	光 (大分大)
		羽	賀	宣	博 (福岡大)
演	者	入	江	慎一郎 (福岡大)	
		鑑	野	秀	一 (鹿児島大)
		小	林	泰	之 (岡山大)
		森	實	修	一 (鳥取大)
		秦		聡	孝 (大分大)

司会の言葉

膀胱全摘術除術後に引き続き行われる尿路変向術には、尿管皮膚瘻術、回腸導管造設術や回腸利用膀胱再建術等が、本邦において主に行われている。たとえ順調な術後経過であっても、膀胱を失うことによる QOL の低下は著しい。さらに、尿路変向術は、1 つ 1 つの手技自体の難易度は高くないものの、そのステップが多く、また 1 つの手術操作の過ちは、重篤な合併症を引き起こし、更なる QOL の低下を来しうするため、繊細な気配りを要する。ほとんどの泌尿器科医は、尿路変向術後の合併症に悩まされた経験を有していると推察する。手術は術者のセンスが関与し、症例数ではないといわれる一方で、ハイボリュームセンターで行われる手術成績は安定している事も事実である。その理由として、手術手順が標準化され、術者ごとのばらつきが少ないことがあげられる。さらに、その施設ごとの術式の工夫がなされていると思われる。そこで、この分野の経験豊富なエキスパートに、手術手技のこつや工夫を教示いただくことは、私達泌尿器科医のみならず、治療を受ける患者さんにとっても大変有用なことであると考えられる。

2018 年には、ロボット支援膀胱全摘除術が保険収載され、体腔内、そしてハイブリッド式での尿路変向術・再建術の報告が、本邦でも徐々に報告され、尿路変向術に関しても、本邦において新時代が到来したと思われる。ロボット補助下における尿路変向術は、未だ完全に標準化されていない部分もあるが、本シンポジウムでは、こ

の分野のエキスパートの 5 人の先生方にご登壇いただいた。各シンポジストの発表概要は以下のとおりである。

入江慎一郎先生 (福岡大学) からは、「チューブレス尿管皮膚瘻術の基本とコッー手術手技から術後管理まで」と題し、開創手術における尿管皮膚瘻作成術に関するご講演いただいた。福岡大学では、90% 以上のチューブレス達成率がなされており、そのポイントとして、適切な患者選択、尿管の十分な剥離と、そして出口部の狭窄をきたした症例でも、決してあきらめない気持ちで対応することが重要であると話された。

鑑野 秀一先生 (鹿児島大学) からは、「合併症から考える尿路変向術」と題し、鹿児島大学での豊富な尿路変向術の経験に基づいたご発表をされた。体腔外操作による 100 例以上の尿路変向のご経験があり、その横行結腸導管などのバリエーションも非常に豊富であったことに驚かされた。術後に尿管狭窄をきたさない回腸導管における Wallece 法の工夫のご発表が、非常に印象に残った。

小林 泰之先生 (岡山大学) からは、「RARCICUD 失敗から学んだこと」と題し、ご講演をいただいた。本邦において、非常に早い時期からロボット支援膀胱全摘術を導入されているご施設からのご発表である。外科医にとって、トラブルケースをプレゼンテーションするのは、非常に勇気がいることである。しかし、一方で先人のトラブルは、追従する私たちにとっては、非常に有用な情報となりうる。今回のご講演では、体腔内での回腸導管作成時の、腸管の並べ方が回腸導管の糞路や尿路再建に重要であるというお話を大変興味深く拝聴させていただ

いた。

森實 修一先生（鳥取大学）からは、「RARCにおけるHybrid 尿路変向術式」と題し、ご講演をいただいた。ICUD の利点として、繊細な縫合操作が可能である点があげられる。問題点としては、体腔内での腸管の位置関係の把握、腹腔内の便汚染、長時間の頭低位等があげられる。Hybrid 尿路変向術式は、これらの欠点を克服した非常に有用な方法である。今後多くの施設でも実施されるのではないかと推察された。また、90 歳台の RARC も実施されているとのことであり、RARC の低侵襲性と、鳥取大学における手技の安定化をうかがわせるご発表であった。

秦 聡孝先生（大分大学）からは、「RARC における回腸導管造設術：私の工夫 ～ECUD から ICUD へ～」と題し、ご講演をいただいた。大分大学も、本邦における腹腔鏡下膀胱全摘除術のトップランナーとして、非常に早い時期から、ECUD および ICUD の多数のご経験を有する施設である。講演では、非常に細かな手順をお示しになり、今後、ICUD を導入する施設には大変ためになるご講演であった。また、本旨とはずれてしまうが、3 cm の創部から、遊離した膀胱を摘出するというお話は、大変驚かされた。

今回のシンポジウムが、尿路変向術を実施する泌尿器外科医の診療にお役立ていただければ幸甚である。